

## 校異源氏物語・梅かえ

御もきのことおほしいそく御こゝろをきて世のつねならす東宮もおなし二月に御かうふりのことあるへければやかて御まいりもうちつゝくへきにや正月のつこもりなれはおほやけわたくしのとやかなるころをひにたき物あはせ給大弐のたてまつれるかうとも御覧するになをいにしへのはをとりにてやあらむとおほして二条院のみくらあけさせ給てからのものもととりわたさせ給て御らむしくらふるにゝしきあやなとも猶ふるき物こそなつかしうこまやかにはありけれどてちかき御しつらひのものゝおほひしきものしとねなどのはしともに故院の御よのはしめつかたこまうとのたてまつれりけるあやひこんきともなといまの世のものにゝすなをさまゝ御らむしあてつゝせさせ給てこのたひのあやうすものなどは人々に給はすかうともはむかしいまのとりならへさせ給て御かたゝゝにくはりたてまつらせ給ふたくさつゝあはせさせ給へときこえさせ給へりをくりものかんたちめのろくなと世になきさまにうちにもことしけくいとなり給にそへてかたゝゝにえりとゝのへてかなうすのをとみゝかしかましきころなりおとゝはしんでんにはなれおはしまして承和の御いましめのふたつのほうをいかてか御みゝにはつたへ給けん心にしめてあはせ給うへはひんかしのなかのはなちいてに御しつらひことにふかうしなさせ給て八条の式部卿の御ほうをつたへてかたみにいとみあはせ給ほといみしうひし給へはにほひのふかさあさゝもかちまけのさためあるへしとおとゝの給人の御おやけなき御あらそひ心なりいつかたにもおまへにさふらふ人あまたならす御てうとゝもゝそらのきよらをつくし給へるなかにもかうこの御はことものやうつほのすかたひとりこのゝろはへもめなれぬさまにいまめかしうやうかへさせ給へるところゝのこゝろをつくし給へらむにほひとものすくれたらむともをかきあはせていれんとおほすなりけり二月の十日あめすこしふりておまへちかきこうはいさかりに色もかもにるものなきほとに兵部卿の宮わたり給へり御いそきのけふあすになりけることともとふらひきこえ給むかしよりとりわきたる御なかなれはへたてなくそのことかのことゝきこえあはせ給てはなをめてつゝおはするほとに前齋院よりとてちりすきたる梅のえたにつけたる御文もてまひれり宮きこしめすこ

ともあれはいかなる御せうそのすゝみまいれるにかとておかしとおほしたれはほゝゑみていとなれくしきこときこえつたりしをまめやかにいそきものし給へるなめりとて御文は引かくし給つちむのはこにるりのつきふたつすゑておほきにまろかしつゝいれ給へりこゝろはこむるりには五えうのえたしろきには梅をえりておなしく引むすひたるいとのおさまもなよひやかになまめかしうそし給へるえんあるものゝさまかなとて御めとめ給へるに

花の香はちりにし枝にとまらねとうつらむ袖にあさくしまめやほのかなる

を御覧しつけてみやはことくしうすし給さいしやうの中將御つかひたつねとゝめさせ給ていたうゑはし給こうはいかさねのからのほそなかそへたる女のさうそくかつけ給御返も其色のかみにておまへの花をおらせてつけさせ給宮うちのことおもひやらるゝ御ふみかなゝにことのかくろへあるにかふかくかくし給とうらみていとゆかしとおほしたりなにことか侍らむくましくおほしたるこそくるしけれとて御すゝりのついでに

花のえにいとゝこゝろをしむるかな人のとかめん香をはつゝめとゝやあり

つらむまめやかにはすきくしきやうなれとまたもなめる人のうへにてこれこそはことほりのいとなみなめれとおもひたまへなしてなんいとみにくければうとき人はかたはらいたさに中宮まかてさせたてまつりてと思給るしたしきほとになれきこえかよへとはつかしきところのふかうおはする宮なれはなにこともよのつねにてみせたてまつらんかたしけなくてなむなときこえ給あえ物もけにかならずおほしよるへきことなりけりとことはり申給このついでに御方くゝのあはせ給ともをのく御つかひしてこのゆふ暮のしめりにこゝろみんときこえ給へれはさまくおかしうしなしてたてまつり給へりこれわかせ給へたれにかみせんときこえ給て御ひとりともめしてこゝろみさせ給しる人にもあらずやとひけし給へといひしらぬにほひとものすゝみをくれたるかうひとくさなどかいさゝかのとかをわきてあなちにおとりまさりのけちめをゝき給かのわかおほむふたくさのはいまそうてさせ給うこむのちんのみかは水のほとりになすらへてにしのわたとのゝしたよりいつるみきはちかうゝつませ給へるをこれみつのさい相のこの兵衛のそうほりてまひれり宰相中将とりてつたへまいらせ給宮いとするしきはむさにもあたりて侍かないとけふたしやとなやみ給おなしうこそはいつくにもちりつゝひろこるへかめるを人々のこゝろくゝにあはせ給へるふかさあさゝをかきあはせ給へるにいとけふあることおほかりさらにいつれともなきなかに齋院の御くろほうさいへとも心にくゝしつやかなるにほひこと

なりし、うはおと、の御はすくれてなまめかしうなつかしきかなりとさため給  
たいのうへのおほむはみくさあるなかにはい花はなやかにいまめかしうすこし  
はやき心しらひをそへてめつらしきかほりくは、れりこのころの風にたくへん  
にはさらにこれにまさるにほひあらしとめて給夏の御方には人々のかう心く  
にいとみ給なる中にかすくにもたちいてすやとけふりをさへおもひきえ給へ  
る御心にてた、荷葉をひとくさあはせ給へりさまかはりしめやかなるかしてあ  
はれになつかし冬の御かたにもときときによれるにほひのさたまれるにけたれ  
んもあいなしとおほしてくのえかうのほうのすくれたるはさきのすさく院のを  
うつさせ給てきむた、のあそむのことにえらひつかうまつれりし百ふのほうな  
と思えて世に、すなまめかしさをとりあつめたる心をきてすくれたりといつれ  
をもむとくならすため給ふを心きたなきはん者なめりときこえ給月さしいて  
ぬれはおほみきなとまいりてむかしの御物かたりなとし給かすめる月のかけ心  
にくきをあめのなこりの風すこし吹て花のかなつかしきにおと、のあたりいひ  
しらすにほひみちて人の御心ちいとえんありくら人所のかたにもあすの御あそ  
ひのうちならしに御こと、ものさうそくなどとして殿上人などあまたまいりてお  
かしきふえのねともきこゆうちのおほいとの、頭中将弁の少将なともけさむは  
かりにてまかつるをと、めさせ給て御こと、もめす宮の御まへにひはおと、に  
さうの御ことまいりて頭中将わこむ給てはなやかにかきたてたるほいとおも  
しろくきこゆさい相中将よこふえふき給おりにあひたるてうし雲井とをるはか  
りふきたてたり弁の少将ひやうしとりてむめかえいたしたるほいとおかしわ  
らはにてるんふたきのおりたかさこうたひし君なり宮もおと、もさしいらへし  
給てことくしからぬものからおかしきよの御あそひなり御かはらけまいるに

#### 宮

うくひすのこゑにやいと、あくかれんこ、ろしめつる花のあたりにちよも  
へぬへしときこえ給へは

色も香もうつるはかりにこの春は花さくやとをかれすもあらなん頭中将に  
たまへはとりて宰相中将にさす

鶯のねくらのえたもなひくまてなをふきとをせよはの笛竹宰相中将  
心ありて風をよくめるはなの木にとりあへぬまてふきやよるへきなさけな  
くとみなうちわらひ給弁の少将

かすみたに月と花とをへたてすはねくらの鳥もほころひなましまことにあ  
けかたになりてそ宮かへり給ふ御をくり物に身つからの御れうの御なをしの御

よそひひとくたりてふれ給はぬたき物ふたつほそへて御車にたてまつらせ給宮  
花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめむとあれば

いとくつしたりやとわらひ給ふ御車かくるほとにをいて

めつらしとふる里人もまちそみむ花のにしきをきてかへる君またなき事と

おほさるらむとあればいいたうからかり給つきくの君たちにもことくし  
からぬさまにほそなかこうちきなどかけ給かくてにしのおと、にいぬの時に  
わたり給宮のおはしますにしのはなちいてをしつらひて御くしあけの内侍など  
もやかてこなたにまいれりうへもこのついでに中宮に御たいめんあり御かた

くの女房をしあはせたるかすしらすみえたりねの時に御もたてまつるおほと  
なふらほのかなれと御けはひいとめてたしと宮はみたてまつれ給ふおと、おほ  
しすつましきをたのみにてなめけなるすかたをす、み御覽せられ侍なりのちの  
世のためしにやと心せはくしのひ思たまふるときこえ給宮いかなるへきこと  
も思たまへわき侍らさりつるをかうことくしうとりなさせたまふになん中  
く心をかれぬへくとの給けつほとと御けはひいとわかくあいきやうつきたる  
におと、もおほすさまにおかしき御けはひどものさしつとひ給へるをあはひめ  
てたくおほさるは、君のかゝるおりたにえみたてまつらぬをいみしとおもへり  
しも心くるしうてまうのほらせやせましとおほせと人のものいひをつゝみてす  
くし給つかゝる所のきしきはよろしきにたにいとことおほくうるさきをかたは  
しはかりれいのしとけなくまねはむも中くにてやとてこまかにかゝす春宮の御  
けんふくは甘よひのほとになんありけるいとおとなしくおはしませはひとのむ  
すめともきほひまいらすへきことを心さしおほすなれと此との、おほしきさす  
さまのいこととなれは中くにてやましらはんと左のおと、などもおほしと、  
まるなるをきこしめしていとたいくしきことなりみやつかへのすちはあまた  
あるなかにすこしのけちめをいとまむこそほいならめそらのきやうさくのひ  
めきみたちひきこめられなは世にはえあらしとの給て御まいりのひぬつきく  
にもとしつめ給けるをかゝるよしところくきにきゝ給て左大臣殿三の君まいり  
給ぬれいけい殿ときこゆるこの御かたはむかしの御とのゐ所しけいさをあらた  
めしつらひて御まいりのひぬるを宮にも心もとならせ給へは四月にとさため  
させ給御てうと、もゝもとあるよりもと、のへて御身つからものゝしたかた  
ゑやうなとも御らむしいれつゝすくれたるみちくの上手ともをめしあつめ  
てこまかにみかきと、のへさせ給さうしのはこにいるへきさうしものやかて  
ほむにもし給へきをえらせ給いにしへのかみなきゝはの御てどもの世になをの

こしたまへるたくひのいとおほくさふよろつのことむかしにはおとりさまにあさくなりゆくよのすゑなれとかむなのみなんいまのよはいときはなくなりたるふるきあとはさたまれるやうにはあれとひろき心ゆたかならすひとすちにかよひてなんありけるたへにおかしきことはとよりてこそかきいつる人々ありけれと女てを心にいれてならひしさかりにこともなきて本おほくつとへたりしなかに中宮のはゝみやす所の心にもいれすはしりかい給へりしひとくたりはかりわさとならぬをえてきはことにおほえしはやさてあるましき御名もたてきこえしそかしくやしきことに思し給へりしかとさしもあらさりけり宮にかくうしろみつかうまつることを心ふかうおはせしかはなき御かけにもみなをし給らん宮の御てはこまかにおかしけなれとかとやをくれたらんとうちさゝめきてきこえ給ふこ入道の宮の御てはいと気色ふかうなまめきたるすちはありしかとよはき所ありてにほひそすくなかりし院のないしのかみこそいまの世の上すにおはすれとあまりそほれてくせそそひためるさはありともかの君と前斎院とこゝにとこそはかき給はめとゆるしきこえ給へはこのかすにはまはゆくやときこえ給へはいたうなすくし給そにこやかなるかたのなつかしさはことなるものをまんなのすゝみたるほどにかなはしとけなきもしこそましるめれとてまたかゝぬさうしともつくりくはへてへうしひもなといみしうせさせ給ふ兵部卿の宮さへもんのかみなどにもものせんみつからひとよろひはかくへしけしきはみいますかりともえかきならへしやと我ほめをしたまふすみふてならひなくえりいてゝれいの所／＼にたゝならぬ御せうそこあれはひとひとかたきことにおほしてかへさひ申給もあれはまめやかにきこえ給ふこまのかみのうすやうたちたるかせめてなまめかしきをこのものこのみするわかき人々心みんとて宰相の中将式部卿の宮の兵衛督うちのおほいとのゝとうの中将などにあしてうたゑを思／＼にかけとの給へはみな心／＼にいとむへかめりれいのしん殿にはなれおはしましてかき給ふ花さかり過てあさみとりなる空うらゝかなるにふるきことゝもなおもひすまし給ひて御心のゆくかきりさうのもたゝのも女てもいみしうかきつくし給ふ御まへに人しけからす女房三三人はかりすみなとすらせ給てゆへあるふるきしうの歌なといかにそやなとえりいて給ふにくちおしからぬかきりさふらふみすあけわたしてけうそくのうへにさうしうちをきはしちかくうちみたれてふてのしりくはへておもひめくらし給へるさまあくよなくめてたししろきあかきなどけちえんなるひらはふてとりなをしよういし給へるさまさへみしらむ人はけにめてぬへき御ありさまなり兵部卿の宮わたり給ときこゆれはおとろき

て御なをしたてまつり御しとねまいりそへさせ給てやかてまちとりいれたてまつり給ふこの宮もいときよけにてみはしまよくあゆみのほり給ふほとうちにも人々のそきてみたてまつるうちかしこまりてかたみにうるはしたち給へるもいときよらなりつれ／＼にこもり侍もくるしきまておもふ給へらるゝこゝろののとけさにおりよくわたらせ給へるとよろこひきこえ給ふかの御さうしもたせてわたりたまへるなりけりやかて御覽すれはすくれてしもあらぬ御てをたゝかたかにいといたうふてすみたるけしきありてかきなし給へりうたもことさめきそはみたるふることともをえりてたゝみくたりはかりにもしすくなにこのましくそかき給へるおとゝ御覽しおとろきぬかうまてはおもひたまへすこそありつれさらにふてなけすてつへしやとねたかり給ふかゝる御中におもなくたすふてのほとさりともしなんおもふたまふるなとたはふれ給ふかき給へるさうしともゝかくし給へきならねはどうて給てかたみに御覽すからのかみのいとすくみたるにさうかき給へるすくれてめてたしとみ給にこまのかみのはたこまかになこうなつかしきか色などとはなやかならてなまめきたるにおほとかなる女てのうるはしう心とゝめてかき給へるたとうへきかたなしみ給ふ人のなみたさへ水くきになかれそふ心地してあくよあるましきにまたこゝのかんやのしきしの色あひはなやかなるにみれたるさうのうたをふてにまかせてみたれかき給へるみどころかきりなししところもとろにあひきやうつきまほしければさらにのこりともにめもみやり給はすさへもんのかみはこと／＼しうかしこけなるすちをのみこのみてかきたれとふてのをきてすまぬ心地していたはりくはへたるけしきなりうたなともことさらめきてえりかきたり女の御はまほにもとりいて給はす齋院のなどはましてとうて給はさりけりあしてのさうしともそ心／＼にかなふおかしきさいしやうの中将のはみつのいきをいゆたかにかきなしそゝけたるあしのおいさまなどにはのうらにかよひてこなたかなたいきましりていたうすみたるところありまたいとかめしうひきかへてもしやういしなどのたゝすまひこのみかき給へるひらもあめりめもをよはすこれはいとまいりぬへきものかなとけうしめて給ふなにこともものこのみしえんかりおはするみにていといみしうめてきこえ給けふはまたてのことゝもの給くらしさま／＼のつきかみのほんともえりいてさせ給へるつゐてに御このしゝうして宮にさふらふほんともとりにつかはすさかの御かとの古万葉集をえらひかゝせ給へる四巻延喜のみかとの古今和歌集をからのあさはなたのかみをつきておなし色のこきもんのきのへうしおなしきたまのちくたむのからくみのひもなとなまめかしうて

まきことに御てのすちをかへつゝいみしうかきつくせ給へるおほとなふらみ  
しかくまいりて御らんするにつきせぬものかなこのころの人हतゝかたそはを  
けしきはむにこそありけれなとめてたまふやかてこれほとゝめたてまつり給ふ  
女こなとをもて侍らましにたにおさゝみはやすましきにはつたふましきをま  
してくちぬへきをなときこえてたてまつれ給しゝうにからのほんなどのいとわ  
さとかましきちんのはこにいれていみしきこまふえそへて奉れ給又この比はた  
ゝかなのさためをし給て世中にてかくとおほえたる上中下の人々にもさるへ  
きものともおほしはからひて尋つゝかゝせ給この御はこにはたちくたれるをは  
ませ給はすわざと人のほとしなわけ給つゝさうしまき物みなかゝせたてまつ  
り給よろつにめつらかなる御たから物とも人のみかとまでありかたけなるなか  
にこのほんともなんゆかしと心うき給わか人よにおほかりける御ゑともとゝ  
のへさせ給なかにかのすまの日記はすゑにもつたへしらせむとおほせといま  
すこし世をもおほししりなんにとおほしかへしてまたとりいて給はすうちのおと  
ゝはこの御いそきを人のうへにてきゝ給ふもいみしう心もとなくさうゝしと  
おほすひめ君の御有様さかりにとゝのひてあたらしうつくしけなりつれゝ  
とうちしめり給へるほといみしき御なけきくさなるにかの人の御けしきはたお  
なしやうになたらかなれば心よはくすゝみよらむも人ははれに人のねんころ  
なりしきさみになひきなましかはなと人しれすおほしなきてひとかたにつみ  
をもおほせ給はすかくすこしたはみ給へる御気色を宰相の君はきゝ給へとしは  
しつらかりし御心をうしとおもへはつれなくもてなしゝつめてさすかにほかさ  
まの心はつくへくもおほえす心つかからたはふれにくきおりおほかれとあさみと  
りきこえこちし御めのとゝもに納言にのほりてみえんの御心ふかゝるへしおと  
ゝはあやしうきたるさまかなとおほしなやみてかのわたりのことおもひたえ  
にたらはみきのおとゝ中務の宮などのけしきはみいはせ給めるをいつもおも  
ひさためられよとの給へともものきこえ給はすかしこまりたる御さまにてさふ  
らひ給ふかやうのことはかしこき御をしへにたにしたかふへくもおほえさりし  
かはことませまうけれといまおもひあはするにはかの御をしへこそなかきため  
しにはありけれつれゝゝものすれは思所あるにやと世人もおしはかるらんを  
すくせのひくかたにてなをゝしきことにありゝてなひくいとしりひに人わ  
ろきことそやいみしうおもひのほれと心にしもかなはすかきりのある物からす  
きゝしき心つかはるないはけなくより宮のうちにおいいてゝ身を心にまかせ  
す所せくいさゝかの事のあやまりもあらはかるゝしきそしりをやおほむとつ

ゝみしたになをすきくしきとかをにおいてよにはしたなめられき位あさくにな  
となきみのほうちとけ心のまゝなるふるまひなと物せらるな心をのつからお  
こりぬれはおもひしつむへきくさはひなきとき女のことにてなむかしこき人む  
かしもみたるゝためしありけるさるましきことに心をつけて人のなをもたてみ  
つからもうらみをおふなむつるのほたしとなりけとりあやまりつゝみんなの  
わか心になはすしのはむことかたきふしありともなをおもひかへさん心にな  
らひてもしはおやの心にゆつりもしはおやなくて世中かたほにありとも人から  
心くるしうなとあらむひとをはそれをかたかによせてもみ給へ我ため人のた  
めついによかるへき心そふかうあるへきなどのとやかにつれくなるおりはか  
ゝる御心つかひをのみをしへたまふかやうなる御いさめにつきてたはふれにて  
もほかさまの心をおもひかゝるはあはれに人やりならすおほえ給ふをんなもつ  
ねよりことにおとゝの思なけき給へる御けしきにはつかしうき身とおほしし  
つめとうへはつれなくおほとかにてなかめすくし給御ふみはおもひあまり給折  
ゝあはれに心ふかきさまにきこえ給ふたかまことをかとおもひなからよなれ  
たる人こそあなち人に人の心をもうたかふなれあはれとみたまふしおほかり  
なかつかさの宮なんおほとものにも御けしき給りてさもやとおほしかはしたな  
と人の聞えければおとゝはひきかへし御むねふたかるへしゝのひてさることを  
こそきゝかなさけなき人の御こゝろにもありけるかなおとゝのくちいれ給し  
にしふねかりきとてひきたかへ給ふなるへし心よはくなひきても人はらへなら  
ましこととなみたをうけての給へはひめ君いとはつかしきにもそこはかとな  
くなみたのこほるれははしたなくてそむき給へるらうたけさかきりないかに  
せましなをやすゝみいてゝ気色をとらましなとおほしみたれてたち給ぬるなこ  
りもやかてはしちかうなめ給あやしく心をくれてもすゝみいてつるなみたか  
ないかにおほしつらなとよろつにおもひゐ給へるほどに御ふみありさすかに  
そみたまふこまやかにて  
つれなさばうき世のつねになりゆくをわすれぬ人や人にことなるとありけ  
しきはかりもかすめぬつれなさよとおもひつつけ給はうけれと  
かきりとて忘かたきをわするゝもこや世になひく心なるらむとあるをあや  
しとうちをかれすかたふきつゝみゐたまへり